



「近くて遠い国」で学んだこと

馬居 政幸 (静岡大学)

1. 梧井中学の生徒に問われて

「おねえさん方は、昔、日本で大きな地震があったときに、韓国人がたくさん殺されたことを知っていますか。そのことをどう思いますか。」

「今、韓国には、日本からいろんなものがいっぱい入ってきています。今度は経済や文化で韓国を支配しようとするのですか。」

私は今年の2月、「韓国の人と歴史と教育の交流旅」と題し、研究室の学生11名(女10, 男1)と友人の教師や教育委員会の人達4名と共に、韓国の大田(テジョン)市にある梧井(オジョン)中学校を訪問した。その際、学生と梧井中学2年の代表10名とで懇談会を持った。そこで一人の女子中学生から出されたのが冒頭の二つの質問である。私達を迎えてくれた梧井中学の宋先生の「なにか日本のお姉さん方に聞きたいことがありますか」との問いに、即座に手を上げての質問であった。

「きた!」と思わず私は叫んでしまった。そして参観日に教室の後ろでわが子の発表を待ち望む父親のような気分で、学生が答えるのを待った。

学生はどのように答えたか。その内容は本稿の最後に示したい。理由は“Part II”の読者にも、自分がその場にいるつもりで中学生の質問にどのように答えるかを考えていただきたいからである。

本誌の読者の多くは若い先生方であろう。昭和24年生まれの私より、中学生の前で悩む私の研究室の学生の年代に近い方が多いのではないか。私は朝鮮戦争(六・二五動乱)による特需をバネにした日本経済の復興とともに幼児期を生き延びた団塊の世代の尻尾。銃をとった男と銃後を守った女の世代の子どもである。戦争の悲惨さを被害者として身近に知るとともに、加害者としてアジアの人達に対する負

い目(責任)の一端を感じる世代の最後と思っている。(ただし、その思いの浅さへのいらだちが、私を韓国の旅に向かわせたことはあとでのべる。)

他方、私と共に訪韓した学生は、学校で教わったかどうかに関わらず、書物やマスコミ等による“情報”として、日本と韓国あるいは朝鮮(韓)半島との関わりを歴史を知ってはいた。だが、自分の身にかかる問題として“悩み”経験はない。戦争は受験やレポートのために記憶し調べる過去の出来事。韓国と日本との関わりも例外ではなかった。

しかし、彼や彼女達も教師になれば、日本に最も近い国が「近くて遠い国」といわれる理由を教えなければならぬはず。言葉の意味は教えられても、その意味の重さ、さらに何よりも「近くて遠い国」の人達の“思い”を伝えることは困難であろう。その困難さに学生がいかに気付くか。

最も日本に近い国の中学生が率直に問い掛ける日本と日本人に対する疑問にいかにか“とまどう”か。日本で生活する同年代の人達を教えることを職業として選んだ者が、自分の問題として“悩む”機会をつくること。これが韓国を訪れる度に問われ(問い詰められ)、冷汗を流しながら学んだことへの私自身の“応え”(答えではない)であり、学生と共に韓国を訪れた目的であった。思わず「きた!」と叫んでしまった理由でもある。

2. 私の韓国との出会い

私の韓国への関心は、1986年10月から1988年3月までの間、教員留学生として私の研究室にこられた宋在鴻(Son Jae Hong)先生との出会いにより始まった。先生の現在の職場は梧井中学校。社会科と国史科を担当し、私達を迎えてくれた方である。

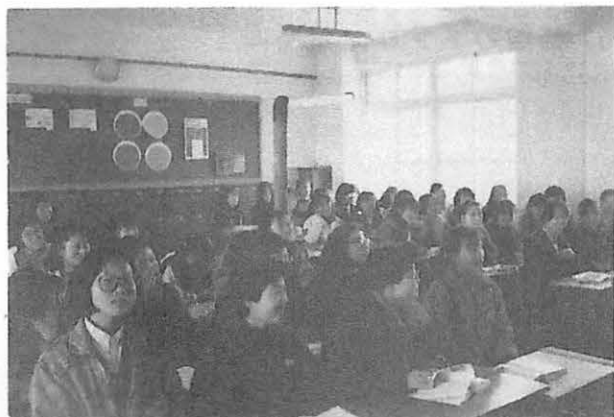
この宋先生が留学時に示された非常に真摯な研究

態度や極めて積極的な探究心や向上心に接し、私は韓国の教育の伝統と現状に強い興味を覚えた。だが何よりも私にとって衝撃的だったのは、帰国を前にして語った宋先生の次の言葉であった。

「私は日本が嫌いです。だからきました。」

私も日本の研究者の一人として、韓国の人達が日本を嫌っていることもその理由も知っているつもりでいた。だが普段の私への態度から、宋先生は違うと思っていた。ところがそれは私の勝手な思い込みであったわけである。とまどう私の顔を見てか、宋先生は母国を支配した日本で学ぶことについてのアンビバレンツな思いを切々と語ってくれた。だが私には、残念ながら、宋先生が語る言葉の意味は理解できても、その思いを私自身の経験に基づく実感として共有することができなかった。

私は、心の内を明かしてくれた宋先生の信頼に応えるために、また先に述べたように半島の支配にかかわる世代を親に持つ一人の人間として、宋先生の思いの背後にある韓国の人と社会の現実を、自分の五感で確かめなければならぬと考えた。そのため宋先生が帰国した年の夏を皮きりに、先生が住む大田を訪ね、小学校、中学校、高等学校、師範大学を何度も訪問し自分の疑問をぶつけていった。



特に、宋先生の通訳で社会科や国史の授業に参加し中学生と語りあった。日本とほとんど変わらない教室と授業の中で、日本の中学生からは感じられない率直さで、次々と私に日本と日本の中学生への疑問と興味を質問してくる彼や彼女達。その言葉や表情に、自分の意見を明確にもち積極的に主張するこ

とを鍛える韓国の人の子の過程を教えられた。

また、韓国に刻まれた日本の姿を求めて、百済の都の扶餘を始め古代日本と関わりの深い史跡をたずね、独立記念館や板門店にも行った。しかし、実際に歩いての驚きは、どんな小さな寺院や古墳にも日本の姿を見出すことができることであった。ハングル文字と漢字で記した説明板の中に、日本に文化を伝えたことへの韓国の人達の誇りと、それを自覚しない日本へのいらだちを感じざるをえなかった。

他方、現代韓国の教師の日常を経験するために宋先生のお宅で生活。宋先生の奥さんと行った市場やデパートで韓国の女性のしたたかさを、その姿を撮ろうと不用意にむけたカメラを見て厳しく叱る初老の紳士に東洋の礼儀の国の伝統を学んだ。零下20度近い夜に宋先生と駅の広場にある屋台にいき、安い焼酎を飲み交わして思いを大声でぶつけ合った。

このような韓国での生活で学んだことは数えきれないが、特にここでは二つ課題を提示したい。

3. 韓国は先生、日本は生徒

第一の課題は、韓国を知ることなく日本を語ることはできないということである。

高松塚古墳を代表に古代日本が百済や新羅と密接な関係にあったことはよく知られている。最近発掘された伽耶の遺跡により、日本書記に記された任那の日本府が存在しなかったことを、今年三月のNHKスペシャルで知った方も多いのではないか。

だがこのような関係は古代のみでない。韓国での旅で痛感したのは、第二次大戦後の日本経済の復興と朝鮮戦争（六・二五動乱）の関係にいたるまで、日本の歴史は朝鮮（韓）半島からの視点を無視しては描けないことである。たとえば次の3人について私達はどれほど知っているだろうか。

李舜臣（イ スン シン）

安重根（アン ジュン クン）

柳寛順（ユ クァン スン）

本誌の読者であればいずれも名前は知っているであろう。特に、李舜臣は、亀甲船で豊臣秀吉の軍隊

を破った将軍として、少なくとも中学校の社会科では教えるであろう。ただし、文禄の役が韓国で壬辰倭乱といわれる理由を追求する授業はどうか。李舜臣の銅像が首都を守るように、ソウル駅につながる大通りに立ち、文武両道に優れた名将として韓国で最も尊敬されている人であり、亀甲船のモデルがいたるところに飾られて民族精神の象徴になっている意味を問う授業はあるか。豊臣軍が半島をどれほど破壊し人々を殺戮したか。逆に、捕虜として日本に連行された人達が、朱子学や陶器を代表に、どれほど日本文化を創造する役割を担ったかにふれる授業はあるだろうか。まして、多くの捕虜がオランダの奴隷商人に売られた事実を知る日本の教師も歴史学者もほとんどいないのではないか。

4. 韓国の教育と子どもにとって日本は

安重根の場合はどうか。日本では伊藤博文の暗殺者としてふれるに止まる場合が多いのではないか。韓国では全く逆。「侵略の元凶」である「初代韓国統監」の命を奪った「民族の英雄」として、李舜臣とともに尊敬されている人である。

日本でもっとも知られていないのが柳寛順ではないか。彼女は15才の少女でありながら梨花学堂（現在の梨花女子大の前身）の学生として「三・一独立運動」の先頭にたってたたかった。そして逮捕されたあと拷問をうけてもなお主張をまげず、17才で獄死。現在、彼女の故郷の天安には広大な敷地をもって独立記念館が建設されている。

この独立記念館には韓国の歴史が9ホールにわけて展示されている。とりわけ李舜臣の功績や近代以後の日本による破壊と犠牲を、見学に来る人達が目瞭然にできるように、写真や資料とともに実物大の模型や非常にリアルな蠟人形の姿で再現されている。安重根の凛々しい像が展示館の入口にある。

このような李舜臣、安重根、柳寛順の三人の生涯や功績あるいは背景となる歴史は、より詳細に、小・中学校の国語や社会科や国史の教科書に掲載されている。（韓国の社会科は小学校3年から始まり教

科書も日本と類似。1, 2年は生活科。中学校も社会科は日本と同様だが、2, 3年で国史が独立し教科書は国定。なお、韓国の学校制度や教科書や授業の実態については別の機会に紹介したい。）

独立記念館は修学旅行のコースであり、祖父母や親が孫や子どもに自分史を語る場でもある。8月15日の独立記念日には大統領が国民に向かって演説をする場でもある。ただし、日本の旅行会社の行うバック旅行や観光地図には入らない場でもある。

冒頭で紹介した中学生の質問の背景が見えてきたであろう。私は、これらを見出す度に、自分の不明を恥じ、加害者性の自覚の浅さを反省せざるをえなかった。もちろん、歴史的事実の解釈は国によって異なる。だが、この三人はいずれも日本の侵略に対して戦ったのであり、その歴史的事実を私達は否定できない。さらに、韓国の子供達も誰もが学校でまさに人物を通して学ぶわけである。日本の子供達との間にある溝は深いと言わざるをえない。

しかし、他方で、独立記念館に二回三回と訪れ、宋先生のクラスの中学生と対話を重ねるうちに疑問が生じてくるのを禁じえなかった。日本ではなく韓国の子供達にとってである。その疑問を明確に意識したのは次の事実に出会ったときであった。

5. 韓国のドラゴンボール



上の写真は、今年の正月に慶州からソウルに向かう途中でよった駅の側の小さな本屋で見つけたものである。いずれも日本の漫画のハングル版。韓国でドラゴンボールや北斗の拳が子供達に人気があると聞いていたが、これほどとは思わなかった。特にド

ドラゴンボールは日本とリアルタイムに近い。
さらに次の二枚の写真を見ていただきたい。



表はドラゴンボールにキャンディキャンディ、裏は掛け算とハングルの一覧。日本の五十音と九九にあたる。ともに小学校入学時に子供が遊ぶ(学ぶ)もの。これは大田の最大の文房具店で見つけた。同じ物がソウルのロッテデパートの中にある書店でも売られていた。そこでは日本のテレビアニメシリーズそっくりの絵本が文字のみハングルに変えて並んでいた。冒頭の質問のもう一つの背景である。

私はこれらを書店や文具店で発見して非常に複雑な気分になった。学校では日本がいかに悪いかが教えられ、日常生活は日本のもので一杯、というわけである。それも、質問した中学生がどれほど知っていたか不明だが、少なくとも私が取材した限り、ドラゴンボールやキャンディキャンディを日本の漫画と知る親は少ない。宋先生も例外ではなかった。

いったい韓国の子ども達にとって日本とは何なのか。そして日本の子ども達にとって韓国とは。

この疑問を解く鍵は学生の答えの中にあった。

6. 学生の“答え”と私の“応え”

「知っています。よくないことです。二度としてはならないことです……。」

「日本の文化や商品が溢れているのは韓国だけではありません。それをどのように考えるかは、韓国人達の問題です。自分で判断することです！」

これが冒頭の質問への学生の“答え”である。私は最初の答えにホッとしつつも、後者の意見にとまどった。ところが思いがけずも宋先生が、「そのとおりです。非常にいい答えです。」と賛同の声をかけてくれ、非は非として認めた上で、互いの問題点を指摘しあえることこそ韓国と日本が「近くて近い国」になれる道である、と日本語とハングルで話してくれた。私は感動した。そしてこの学生と宋先生の言葉に自分の疑問への“応え”を見出した。

侵略の事実を認め、その誤りと愚かさを後の世代に教え続けること。これが「近くて近い国」になるために日本がなすべき第一歩である。だがそれは批判に“答え”を出したに過ぎない。問題はその上でどう“応え”るか。誤解を恐れずにいえば、政府が謝り教科書が変わろうとも、最も「近い国」で生活する人と人之間にある溝は埋まらないと考える。

教科書の中の日本批判と生活の中の日本文化の狭間で日本の実像に飢える韓国の子供達。最も近い国との関わりを受験のための知識でしか問う意欲のない日本の子供達。この現状が続く限り、互いに「遠い国」であり続けるであろう。では何が必要か。

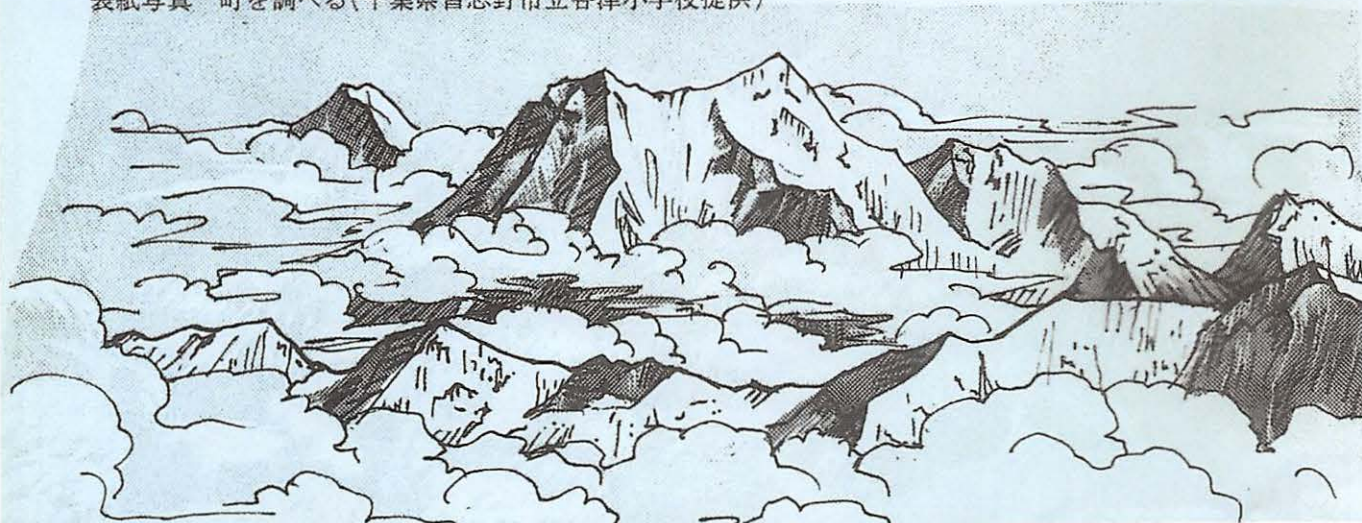
互いの“いま”に“学びあい教えあう”こと。そのために、利害に引きずられた政治や経済の次元でなく、新たな時代の担い手となる両国の若者や子供達が直接“知りあえる”機会をどれだけつくるか。これが「近くて近い国」の条件であり、私が韓国で学んだもう一つの、そして最も重要な課題。学生との旅を私自身の“応え”とした理由である。

今年の11月、次の“応え”への歩みを進める予定である。改めて新たな出会いを本誌で報告できることを願って「近い国」への第一報を終わりたい。

■“Part II”によせて	1
●備前焼の二宮金次郎(白石義則)	
■提言	2
●限りなき前進と挑戦を!(谷川彰英)	
■遊びは授業を変えるか	8
●タンポポと遊ぶ(山口 緑)	
●遊び薬は元気のもと(中條典子)	
●「世界一」ゲーム(小森ケン子)	
●自ら遊ぶ人になりませんか?(戸田安信)	
■春のセッション報告	16
●講演「生きている東京湾」(大野一敏)	
●実践報告「環境問題に迫る」(小林信夫)	
■ほっとする	18
■特別寄稿	22
●「近くて遠い国」で学んだこと(馬居政幸)	
■Jalan-Jalan	26
●吃了飯鳴(森川哲治)	
■WE ARE CHILDREN ①	27
■インフォメーション・コーナー	28
■これをヒントに!	29
●シイの実クッキーをつくろう(大前宣徳)	
■この人にKAN=PAI!	29

カット 池田恵美・曾根 玲・山口 緑

表紙写真 町を調べる(千葉県習志野市立谷津小学校提供)



連続セミナー
授業を創る



Part II



No. **17** 1991-8

特集 遊びは授業を変えるか